

特集

[illegible]

システム導入以前の本校では、保護者からの生徒欠席の連絡は電話かケーブリングフォームで受け付けていた。本校の外線は４本のみで、大雨や台風などの災害発生時には、保護者からの連絡で回線が一斉に埋まり、職員室の電話機が長い順番待ちになる光景がよく見られたという。通常時に關しても、授業開始前の朝礼である８時半までに担任が欠席情報を把握するとして早く出勤しなければならなかった。

「necnomie」の導入により、この構造は大きく変わる。保護者はスマートフォン等のデバイスから欠席・遅刻の日時やその理由等を簡単に入力でき、それが即座にシステム上に反映される。最大４人の保護者と同時連絡が可能だった導入前とは異なり、全校生徒３６０人分の欠席登録が同

出欠管理を効率化

教員の仕事は私たち生徒から直接見える部分である授業やその準備の他にも様々ある。成績管理、教育課程編成、指導要録管理、保健関係事務、各種報告書の作成など、これらの仕事はまとめて「校務管理」と呼ばれる。近年、小・中・高等・特別支援学校教育の校務の課題に対し、システム化による解決のため、本校三谷産業が共同で研究・開発した出欠管理システム「necconome」について、開発に携わった先生方を中心に取材し、これからの教育現場での出欠管理のあり方を考察する。（文 東出尚己）

本校と三谷産業株式会社のチームが共同で研究・開発した出欠管理システム「necconome」話す必要があった。」ところが、

朝の混乱を解消
全生徒の同時登録にも対応

システム導入以前の本校では、保護者からの生徒欠席の連絡は電
して早く出勤しなければならなかつた。

函数論

あなたはアリの集団を観察して、ある種の均衡を保とうとする

る2割のアリを取り除いたとしても、残りの集団から新たに「さほり役」が生まれ、結局は同じ比率に落ち着く。つまり集団全体には、ある種の均衡を保とうとする

りの群れを調べると、常に2割たものではなく流動的に入れ替わ
はよく働き、2割はさぼり、残
つていくのである。

このとき重要なことは、誰かを並免れさせるのではなく、誰かを「**一六・二の法則**」と呼ばれる現象である。興味深いのは、この割合が**固定的**ではない点だ。飯にさぼつてい

づけは変わっていく。

では、この視点を人間社会に移してみたらどうだろうか。学校でも職場でも、アリの集団と同じように、努力する人と怠ける人がいる。しかし、さぼっているように映る人の存在も、実は集団全体の均衡を保つうえで必要なかもしれない。もしすべての人が全力で走り続ければ、いずれ誰もが疲弊し、組織は崩壊してしまう。逆に、怠りをもったメンバーがいるから、そ、他者が能力を存分に発揮できる場が生まれる。

働きアリの法則が示しているのは、効率だけでは測ることのできない存在の意味である。役割は定ではなく、状況に応じて誰も変わらう。今日は上位の2割に属していても、明日は中間層に移り、あるいは下位に回ることもある。

では、下2割の「さばる側」に固定されないためには、どうしたらよいだろうか。怠けるアリを知らずと、外から見れば「やる

きことが見えていない」「あるいは「役割を与えられていない」とことが多い。人間でも同じで、自分の役割を自覚できないければ、受け身になり、行動が停滞してしまう原因になりうる。だからこそ、自主的に動き、自分にできることを見つけようとし続けることが大切だ。与えられた課題だけに頼るのではなく、自ら問いを立て、意味を見出しながら行動する。その積み重ねが、下位の2割から抜け出し、自らを成長させる道につながる。

結局のところ、人間社会において「二・六・二の法則」は避けれられない構造の一つである。しかし、私たちはアリと違い、自分の意思で役割を変えていく存在だ。怠けるのではなく休みを「次への準備」ととらえ、与えられた役割に安住するのではなく「自分にしかできない真獣」を探し続けなければならないのだ。

(文 向出ひまり)

QRコードでの出席登録の様子

テスト後にしか欠席状況を確認できなかった。導入前とは異なり、授業ごとの出席状況がわかる機能は、教員側の柔軟な対応に可能にしている。例えば、特定の授業の欠席が多い生徒がいる場合、従来はテスト後にしかその状況自体が担任に分らなかったが、導入後は素早い対応を行えるようになった。

きつかった。

前年の夏、幼稚園児がバスの中に置き去りにされて熱中症で命を落とす痛ましい事故があり、それを知った斎藤先生は「こういう事故つて防ぎきれない」と感じたという。ヒューマンエラーを完全になくすことはできないからだ。しかし、システムを用いたアプローチならば、このような事故をなくせるのではないかと考えた斎藤先生は、当時の中澤校長の助言もあり、その発想を安全管理システムとして本校に取り入れたとい

かった。そこで、中澤校長と本校の斎藤先生、真木啓生先生が三谷産業に協力を要請し、共同でのシステムの研究・開発がスタートした。

2023年の春、まず行ったのは開発環境の選定だった。グーグルかマイクロソフトか、どちらをベースにソフトウェアを作るのか、から議論は始まった。すでに本校生徒のアカウントがあったマイクロソフトベースで開発を始めたいものの、金沢大学から機能の使用許可が下りないなど様々な問題

このように、最初からでも出席登録を行ってしま
いた。最終的にQRコードに落ち
の、対応できないデバイスが
初はNFCタグのみだったも
いう案が出されたのだという。
たためだったが、学校にいるとき
み入力を可能にすることで解決
ただ、デバイスが無ければ出席登
録できない状況も問題なので、
来のカード読み取りも残してい
ということ。こうして3通りの
力方法が生まれ、現在に至る。

生徒自ら登録
3通りの入力方法

授業前の出席確認は、従来の方法である教員の手作業による名簿記入から大きく進化しており、複数の方法で生徒自身が自らの出席履歴を記録できるシステムが導入された。登録方法は、ICチップが内蔵された生徒証を教室の入り口のと

断でき、特に生徒数が多いクラス
や、授業ごとに出席者や座席が変
動する状況においても正確な出席
管理が可能となる。学年が進むに
つれて履修科目や授業の変更が頻
繁に発生する本校の特徴を考え
ても、「誰が出席しているべきか」
を瞬時に判断できることのメリッ
トは大きい。また、担任が手作業

導入まで3年間
改良を重ねて研究・開発

neconomeの構想が生まれたのは2022年。本校の斎藤瑞紀先生が、附属学校園のための

う。開発には生徒のアカウント管理や厳重なセキュリティ管理が必要になることが予想され、特定の

証を読み取って回ったという。当然時間がかかり過ぎることだ。が課題となり、壁への関定も試験したが、当時はそれが唯一の登録手段だったため、列ができるなどして解決しなかった。そこで、三産業の担当者の方から、個人のスマートフォンを使用できるという本校の特色をいかし、個人のデ

の欠席状況を一覽で確認でき、情報伝達のために早朝出勤する必要もなくなった。システム導入により、欠席連絡に要する時間は体感ではあるが半分弱にまで減少したという。

また、同じ画面上で保護者から欠席連絡があつた生徒の情報も同時に確認できる。そのため、目の前の教室にいるべき生徒と、欠席や



NFC読み取り（左）と

は現在とは一部形式が異なる。業の出席人力の際は、現在は生証のICチップ読み取り機の中にあるスマートフォンを、教員が初めだった。当時のプロトタイプ運用を開始したのが2024年



室に設置されたneconome関連設備

カードリーダーにかざす、スマートフォン等で教室内に貼られたQRコードを読み取る、そして設置されたNFCタグを読み取るという3通りだ。このように個々の生徒の情報が即座に入力され、校内ネットワークを経由してクラウド上に転送される。

入力された全生徒の出欠状況は、担任や授業当教員が、担当



生徒証での読み取り (右)

に直面し、プロジェクトが一度り出しに戻ってしまったのだという。そこで着目したのが、マイクロソフトが提供するエデュケーションライセンスタだ。関係各々への様々な説明や審査を経てドメインを取得し、約一年半かけてようやくスタートラインに立てたという。

（文 向出ひまり）

斎藤瑞紀先生インタビュー

導入後の思い語る「苦労の連続だった」

幼稚園バスでの事故がきっかけ

研究が始まったきっかけを教えてください。

斎藤 数年前の夏、幼稚園児がバスに置き去りにされて亡くなる事故が続いて、ヒューマンエラーは無くならないから、こういう事件はシステムで防ぎたいと思ったのがきっかけなんです。子どもの行動を逐一管理するんじゃなくて、そこにいるかどうかだけを把握できればいい、と。その話を当時の中澤校長にしたら、本校の生徒にも応用できるよね、と言われました。速くから通う生徒もいて、登校途中に倒れてしまうことだってあり得る。でも先生の人数は足りないし、特に気を配らなきゃいけない生徒が数人いたらもう崩壊するんです。だからまず、生徒からのSOSにいち早く気づける仕組みが必要だと思いました。

開発中に直面した課題

開発の中で、特に大変だった事を教えてください。

斎藤 最初は金沢大学から付与されたマイクログソフト365のアカウントでシステムを作ろうと試みてたんですが、でも金大の契約

が特殊で、ワードやエクセルみたいなアプリしか使えなかったんです。それが原因で、何度か大学でプレゼンしても却下されました。じゃあクラウドアカウントでやり直そうかと案もあつたんですけど、すでに三谷産業に365のテストアカウントがプログラムを作ってもらったので、それも難しく。じゃあ本校で独自にマイクログソフト365のアカウントを買おうってなりましたが、それはコスト的に無理だった。いろいろ調べた結果、教育機関向けのエデュケーションライセンスなら無料で使えると分かって、それを採用したんです。それで役所に説明して審査を通過してもらって、ドメインを取得して、生徒用アカウントを作って、マイクログソフトに申請して、ようやく教育ライセンスを取得できました。ここまでで約

導入後、現在における課題

1年ほどかかりましたね。

斎藤 今残ってる課題はいくつかあるんですけど、1つはプログラムのベースになっているマイクログソフトの「Power Apps（パワーアップス）」。これ自体が落ちるとアプリも一緒に落ちてしまうんです。2年くらい運用している中で実際に何度か起きてる。だから、紙で出席をとって、だいたいという目ざしでも出さなくていい。実際、校務支援システムに直接入力すれば出席登録はできるんですけど、やっぱりneco nomeが落ちると使えないっていうマイクログソフトの弱さは課題として残ります。でもこれ

は解決できません。もう折るしかない。もう1つは、読み取り機の問題。本当はカードリーダーでやりたかったんですけど、大学にあるやつは1台50万円から200万円くらいで、各教室に置こうとしたら全体で1000万円を超えます。そんなお金は出せないし、保護者から集めるのも無理。じゃあどうするかで、安価な方法を探して、中国製のマホのRedmiはNFCタグを読み取れるので、それを使うことにしました。もともと、カードリーダーだと読み取った情報をクラウドに送る発信機能があったので、スマホが、番上りです。でもスマホって画面の裏に読み取り部分があるんですけど、じゃあどう置くかって話になって、最終的にはスマホ画面を液晶パネルに投影する形にしました。ただ

これは相性が悪くて、単に線を繋げては映らない。変換ハブとアプリをいれなきゃダメなんです。中にいろんなハブを挟む理由ですね。

斎藤 教員からの意見はどんなものがありましたか。

斎藤 懸念があったのは、生徒の位置情報を管理するの、目的から外れること。保護者は生徒の出席情報を見た方がいいという意見も出て、落としどころを保護者教諭と話し合いました。今は、最終登録時間だけがわかるようになっています。子どもが学校にいるのかは分かるし、来てなかった場合、保護者のアプリに通知がいくようにもできる。家で登録するのを防ぎたいというのもあり、GPS機能を使って本校の中に入らないように監視することと出席登録が時間間隔を見ることがあります。ただ

できないようにプログラムされてます。附属高の生徒の気質を鑑みても、おむねこの形がいいんじゃないかと思っています。

保護者や大学側からの懸念の声はありますか。

斎藤 大学側からは、個人情報に属する部分を指摘されました。neco nomeの出席情報は全て数字で管理しているんで、たとえシステムがハッキングされて中身が外部に漏れても、何も分かりません。そのシステムで大学からは許可をもらいました。保護者の方からは、使い勝手が悪いという声は多いけど、バグが多いとか、IDを忘れてしまったとか、タッチが全然できないとか、改善点は残ってます。現代では、図書館の本にICチップを埋め込んで、本棚の奥にある読み取り機で、本棚の奥に入っているか管理できるようにしたシステムもあるんです。だから、生徒がICチップを持っていて、人口にそれを読め取る機械を置けば、人口を通ったら、生徒は何もなくても出席登録できるっていう風にもできる。それは今後の構想です。そういう可能性もあるということ。やっぱり生徒

は他の研究でも、いろんなアイデアが「できたらいな」で終わってるんです。最初のお金が出ないと、授業50分と生徒へのアンケートくらいしかできないから、研究が進まないんです。これが今の日本の教育現場だと思います。仕方ないけど、最後は結局お金がぶつかる壁になるんです。

最後はやっぱり費用の問題になってしまってますね。もし今後うまく費用面が解決したとしたら、附属高全体にこのシステムを広げていく予定ですか。

斎藤 そうです。だから、今はまだしてないんですけど、附属高で、例えば年間50円でもいいので、附属高の生徒がそこに投資していったら、ハードウェアが壊れても買い直す費用が出せるという風に、維持費を出せることができれば、要は、電話回線の代わりというところで、お金をもしP.T.A.の方から出して頂けるとか、そういう風に回して頂けるとか、悪いのか、そもそも内容が今の生徒に合っていないのかって、現場にいないと分からない感覚なんです。だからこそ、教員を辞めずにこういうことをやる意味があるって、今は思っています。

教員からみたシステム

neco nomeの導入は教員が行う出入管理をどう変えたのか。金森先生と浦崎先生に聞いた。

金森 本年度からシステムが本格導入されましたが、便利になりました。パソコンで、保護者からの

欠席とその理由が共有されるのが便利。紙の出席簿時代は、毎回の授業で欠席を取って、それを月末にテスト毎の欠席・遅刻の集計を手計算してたんだね。チェック漏れや誤記が起り得たけど、電子化されて正確性は向上したと思う。

浦崎 欠席と理由が共有されるのは、保護者には、子どもが今どこで授業を受けているか分かるって意味で、安心感があるんじゃないかな。

現状のシステムに対して不便だと感じる点や課題はありますか。

金森 出席簿として過去にさかのぼって確認するっていうのが、すごいんですけど、一時間必要。以前は「いない人チェック」をしていて、今は「いる人チェック」をしていて欠席になる。仕組みなので、生徒が出席していても入力を忘れると欠席扱いになってしまうケースが起る。あと、機器トラブルで入力ができず欠席扱いになることもある。生徒からすると、以前は先生がやってた出入を自分で入力するようになり、手間が増えたと感じるかもしれない。

浦崎 先生は今年度の学校に来

られましたが、このシステムの第一印象を教えてください。

浦崎 すこし進んでいるなという印象。第一印象ですね。ハイテクで機能的にやっているとあっていう印象です。

以前の学校にはこのようなシステムはありませんでしたか。

浦崎 ありませんでした。全部入の手で記録してました。全部の名前を呼んでチェックして、その結果を打ち込む形ですね。

その中で「neco nome」に感じたメリットはありますか。

浦崎 複数のチェックになるっていうのは確か。増えるかなって気はしますが、あと、その場で記録もできる。手入力のミスがなくなりそう。データを見て写すところもその段階でもミスを起こせる。これがあるって、その辺の確率は出てるのかなって気はしますが、機械の故障とかはあります。

仕事量に変化はありましたか。

浦崎 出欠の部分だけを見ていた

ただでも、スムーズになってる感じはします。まあただネット環境が悪いときに時間がかかったりとかはあるけど、確実性が上がると考えたらそこまで気にはならないです。

不便なところ、改善すべきところはありますか。

浦崎 うまく読み取れないとかありません。これから改善はされると思いますが、機械の故障とかはあります。そういう学校の場合は、前の授業との連動性が一切見えないので、



生物室前に設置されたICタグ読み取り機器

大変でした。

浦崎 先生がこういった確認を丁寧に行うのは前の学校の名残もあるんじゃないかな。

浦崎 当時の名残もあるかもしれないけど、やっぱり間違えていたときに大変なことになるので、出欠は丁寧に確認しています。

生徒の名前を覚えておらず確認に手間取ることがあります。

浦崎 私の場合は座席を指定するのでそこまでは手間取ってないと思います。スムーズに取れるようににはなっています。

副担任として担任不在時に欠席確認をされていますが、授業と朝礼で使い方が違いますか。

浦崎 やり方が少し違うところはありますが、それさえ覚えてしまえば難しくはないです。授業のときに生徒がその日1日欠席などの入力をして、その辺の情報が連携されて授業担当者が見れるという意味では、授業の方がシステム之恩恵を大きく感じます。

真木啓生先生インタビュー

「ゼロリスク論」からの脱却

システムと生徒の間の仕組みの設計を中心として行い、システムの名付け親でもある真木先生に、開発の際に込めた思い、そしてこれからの学校現場での「安全管理」についての考えを聞いた。

(文 東出尚己)

真木先生の役割

真木 どちらかというと俺は、システムと人間の間の仕組を設計するって役割だった。便利システムがあっても、結局インターフェイスの部分で使い勝手が悪かったら意味ない。だからどういうときにどうやって使うのかを考えるのが俺の役割だったかな。

安全管理と自主自律のバランス

真木 どう考えても大人は絶対、ガチガチに管理した方が楽なんだよ。余計なことするな、従えってスタンスの方が社会から批判もされない。理解もしてもらえない。でもそれをすると、多分所属のいい所は全て失われてしまう。かといって今の時代、日々気温が40度を超えるかどうかの気候が続く中で、無責任でもないから

現在の改善点

真木 細かい課題でいうと、兄弟の保護者は結構大変らしい。毎回のアカウントにログインし直さないと行けないから。たまた、もって根本的な課題は対人関係の2種類に分かれる。対生徒についていうと、多分みんな来られる先生によってneconomeの使い方が千差万別なところ。多分問題なく運用はされているんだけど、いまだにneconomeが結局何なのか分かっていない生徒がほとんどで、生徒にとつてのメリットをおさらず感じない。だからシステムを作ったとしても、その方法間違えると自主自律の幅、解釈の幅を狭めてしまっているんじゃないかなと思う。このシステムが自主自律を形骸化してしまう可能性がある。ただこれは開発秘話があつて、も

「ゼロリスク」の限界

これからの学校安全管理を考える

「諸刃の剣」

真木 まずneconomeというシステムは、常に「監視ツール」になり得る危険性をはらんでいるわけ。そういう意識は、利用している生徒の中にも絶対にあると思う。先生に「お前登録してないぞ」と言われるっていうことは、常に学校側から出席登録しただけ、本来出席するっていう権利であるはずの事が、義務、監視対象になつていく。それが当たり前になつていくのは怖い。もちろんそれは大学では当然なんだけど、やっぱり理想は中学校と大学の間にある高等学校としての在り方。教員は意識を共有することで監視ツール化を避けることができれば、家庭においては、その危険性を排除するのは難しい。例えば、ただ出席登録しただけとか、本当に体調が悪くて保健室にいた場合も「なんで出席してないんだ」とって保護者に言われてしまうかもしれない。そういう危険性があるシステムだつていうことに、まだ気付いていない先生もいると思う。でも、じゃあどうやってそれを防ぐのかを考えると、なかなか防ぎようがないし、「あれ、うちの子家出たのにまだ学校に行けてない」というのに、まず保護者が気づけるっていうメリッ

安全管理とリスクについて

真木 安全管理への意識は、かなり前から段々と変わつていったんだ。やっぱり決定的だったのは、附属池田小学校事件だと思う。いっすかから入ってて何をするか分からないって状況では、文部科学省は「ゼロリスク」をうたうしかなかった。ただ現実的に、国内のすべての学校がゼロリスクを達成するのは途方もない額の設備投資が必要じゃん。でも実際、満足な設備投資はされな

生徒が「またシステム」

実際にneconomeを使用する生徒の現在のシステムへの考えを知るため、76回生の武川俊太さん、78回生の秋吉智恵さん、吉田彩乃さん(2A)、長曾弘太さん、登岸結衣さん、丸本紗実さん(2B)に取材した。

導入後の感想

武川 そこまで負担には感じず、先生の負担の減少を感じた一方、管理されている、という感覚は常にある。抵抗感も少しはあったものの、受け入れていかなければいけない、と感じました。長曾 管理されている、とは感じ

不満・改善点など

秋吉 QRコードの設置場所が不便。教室の廊下側にあると、廊下側の人から読み取りにくい。登岸 化学室とか美術室とか、反射や位置関係でQRコードを読み取りにくい教室があり、困る。吉田 生徒証は普段の移動教室の際、持ち運ばないで、一回も使わない。私は絶対にQRコード。長曾 面倒に感じる事は少ない。武川 起動に時間がかかる感じが

他校でも運用できるのか

真木 運用の仕方だろうね。「生徒に出席登録をさせる」という方法では、他校では通用しないかもしれない。でも保護者の欠席連絡と教員のチェックが自動で記録されるシステムは多くの教育現場で有用だと思う。このシステムをその学校でどう運用するかが問題。今のところ運用の仕方は難しいから、理由が3つあって、まずそのままだと導入すると「生徒からのSOSにいち早く気づく」という本来の役割が破綻する気がする。例えば毎日のように警察のお世話になったり不在生徒を探し回らなければならないような学校もある。その学校の生徒たちはいろんな問題を抱えているわけだよね。だから先生たちは毎時間、注意深く出席確認をする。そういう学校にそのまま導入しても、出席登録はするけど何も言わず教室からいなくなる生徒がいると、そもそも安全管理が成立しなくなる。2つ目に、この学校の生徒たちは何も言わず出席登録をする生徒が多いけど、他校だと生徒からの文句が多くなると思う。実際、生徒たちがメリッと感ぜられていないのが現状だから。最後に、先生たちが導入する意図を汲み取れないんじゃないかな。「生徒の自由

neconomeのこれから

真木 きつと斎藤先生は形を変えて安全管理システムを県に導入しようと思う。それがいつになるかわからないけど、その間に本校の実証データは増えていて、研究として何年後かに結果が出て、研究としても意味を成すのかな。今は、と

なぜ「ねいんめい」システム名の誕生秘話



neconomeのロゴ

発案者である斎藤瑞紀先生だ。「出来ていうと、過保護になりすぎず、過干渉になりすぎず、でもネグレクトにもなりすぎず、適切な距離を保ちながら子育てや教育をすることが大事で

目的教育」という書籍を出していて、と話すのは、この名称を提案した真木先生だ。その書籍の内容に「付かず離れずの『猫の目の距離感』で生徒児童の発達を見守っていく」という言葉があり、そ

「ねいんめい」という名称を考案した真木先生は、この書籍の内容に「付かず離れずの『猫の目の距離感』で生徒児童の発達を見守っていく」という言葉があり、そ

部活動に未来はあるのか

部活動の課題

変化していく「部活」のカタチ

今年の6月に「金沢大学附属中学校の部活動がなくなる」とマスコミで報道された。なくなる＝廃止と勘違いしがちだが、部活動の形態がなくなり、地域クラブへと移行されるだけである。本記事では、先行移行される運動部に焦点を当てて、地域移行という決断に至った経緯、その決断による影響や今後の展開について、当事者である金沢大学附属中学校校長や本校体育科教員の見解、本校の部活動の現状及び日番制度についてだけでなく、この国の部活自体の現状も踏まえて一本「本紐解いていく」。（文責 山本 安藤、中西）

移りゆく部活動

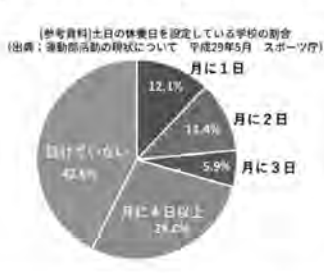
近年、部活動の廃止をうたったニュースをよく耳にする。昨今の働き方改革の一環で、部活動が問題視されているのである。しかし、「廃止」というのは誤用であり、実際に文部科学省が推進しているのは、地域移行である。地域移行とは、学校の部活動から地域のスポーツクラブへと形態を変えることを指している。例を挙げると、学校のサッカー部を解体し、地域のサッカークラブで活動を行う。指導をするのは学校の教員ではなく、クラブのコーチ。このような動きこそが地域移行である。

部活動負担の軽減を目指す石川県

石川県教育委員会は、平成30年に「適切な休業日等の設定（一部抜粋）」を公表した。資料1は、県の資料の一部を抜粋したものだ。

教員の働き方改革と部活動

全国的に問題視されている部活動のデメリットとして、休日の使用が多く、顧問である教員の地域



さらに、石川県は、この方針を発表した平成30年と、5年後の令和5年を比較して、休業日の日数にどのような変化が見られたかの資料を公表している。下の表1を見ると、平成30年から令和5年で「年間52日以上」の休業日がある部活動「休業日の平均日数」がいずれも増加していることが分かる。

（資料1）適切な休業日等の設定（一部抜粋）

- ・休業日は、中学校・高校ともに原則として、週2日以上、平日1日と土曜日又は日曜日とする。
- ・……（省略）……ただし、土曜日、日曜日、祝日は振替休日において年間52日以上を確保する。
- ・通学通学における1日の活動時間は、平日は長くとも2時間程度、学校の休業日は長くとも3時間程度とする。

（出典：石川県における運動部活動の在り方に関する方針 平成30年12月 石川県・石川県教育委員会）

地域移行の問題点は



石川県における部活動休業日の日数の平均

	平成30年	令和5年
中学校	65.6日	75.4日
高校	64.7日	75.9日

石川県における年間52日以上、土日の休業日を設定している部活動数

	平成30年	令和5年
中学校	98.4%	99.5%
高校	83.9%	98.3%

【表1】出典：部活動の地域移行の進捗状況 石川県ホームページ

附属中学校の革新的な決断の裏側に迫る

肅々と進める地域移行

附属中学校で部活動廃止を決めたきっかけを教えてください。戸水 廃止という地域移行について、という文部科学省のホームページにあがっている資料にあるように、地域移行を進めるという国の方針が出ています。本校は、それに従うべき学校なので、このよう

教員の反応は

部活動の地域移行を進める中で他の先生方と議論になる場面もあったと思いますが、どのような議論が行われていたのですか。

地域移行のメリット

実際に今まで部活動で夜遅くまで残っていた先生が早く帰れるようになった事例がありました。戸水 まだ根拠はないので今のところは話しかけようというところですね。地域化によって時間ができると先生方が自分の強みを活かせるようになっていくんじゃないかと考えています。労働時間が減ること、早く帰れること、生活が楽になること、自分の強みを活かしてほしいというのが私としての思いです。自分が専門的に教える

徐々になくなる部活の中で生徒は

地域移行発表後の生徒の反応はどのようなものでしたか。戸水 活動時間を減らすと言ったときに「活動時間を減らさないで」という意思も感じ取ったし、早々に部活がなくなる部活動は「なんで僕たちが」という思いがあったというのには聞いています。それでも、頑張るという大会に出る部もありました。私はうれしかった環境の中で出来ることを考えているという事を生徒にずっと言っているよ。今できることを頑張るよ」と言っていて、県大会出場を決めた試合など、涙が出そうなくらい頑張った試合をいくつも見ました。嬉しいですね。地域移行はどの世代で出す方針だったので、先延ばしの問題に過ぎないんです。私は大会に出る勝つことだけが部活じゃないと思っていまして、勝つ姿だけを見たいわけではなくて、活動時間が少ない中でどうやって頑張っているのかを見

判先生

「舵切りは慎重に」

本校での教員と部活動廃止の関わりについてどう考えていますか。判 部活動自体は生徒の自主的な活動で、教育活動の一環なので、今すぐに地域移行を実行するという考え方は、私の中にはないです。けど、実際の教員の働き方などの昨今の流れがありますね。こうやってスポーツが学校だけじゃなく、地域全体のものになっていくって、それが少しずつ地域に移行するっていう形ができれば、学校の中から一部切り離しても良いかなと思う。だけど今すぐは違うかなと思います。

中学校での部活動の地域移行についてはどう考えていますか。判 立場が2つに分かれると思います。教員としては、部活動を段階的にやめようというのはいらない切った選択だと思ってしまう。その判断はすごいなとも思っています。例えば、教員の働き方を理由

に地域移行の方向に舵を切る、というのであれば、それは教員のことをよく考えてくれているなどは思うんだけど、その一方で、自分の活動で、教育活動の一環なので、今すぐに地域移行を実行するという考え方は、私の中にはないです。けど、実際の教員の働き方などの昨今の流れがありますね。こうやってスポーツが学校だけじゃなく、地域全体のものになっていくって、それが少しずつ地域に移行するっていう形ができれば、学校の中から一部切り離しても良いかなと思う。だけど今すぐは違うかなと思います。

本校での教員と部活動廃止の関わりについてどう考えていますか。判 これも、考え方は大きく2つに分かれますね。一つは、今のまま部活を続けていくことの重要性を本校が、全国各地の高校などに発信していく。もう一つは全く逆の考えで、部活をやめることが、どういった影響を及ぼすのかを、発信する。部活の新しい形をゼロから作り直すっていうのはなかなか労力がかかるので、今の形は無くさない方が無難だと思います。無くなる可能性があるから、何か新しくスポーツを始めようって思った時に、始めるハードルが高くて、踏み出せない。だから、初心者が始める場としての意味では、「部活動の存在価値」はすごく高いと思います。

たいんです。

異年齢に拓かれた生徒たち

職員が空いた時間を自分のために使ってほしいというのは、生徒に対して同じなのではないですか。戸水 そうです。生徒には学校の枠を越えていろいろな方と交流を深めてほしいです。私は文部科学省が「廃止」じゃなくて「地域移行」という言い方にしてきているのはやっぱり意味があるんだろうなと思っています。地域のスポーツクラブに行ったらいろいろな人との交流ができます。保護者、卒業生が地域クラブの指導員となるかもしれない。そういう先輩とのつながりとかもできるかもしれない。それに今、地域防災がとっても大事になってきていますよね。地域のスポーツクラブとかに参加してみたら分かるけれども、地域に密着していた人たちのつながりができると、どこに誰がいるのかがよく見えてくるんじゃないかな。そこで、この方がここにいたはずだから、あの場所まで避難所を開発して運営するとか、いつもの顔見知り同士で活動ができるわけですね。有事の時に、自分の住んでいる家や地域で活躍できることにつながると思っています。

(文責 山本、安藤、中西)

先生や生徒の反応は

つた南波睦前校長が「生徒の安全は守らないといけないけれど、先生たちの働きやすい形を先生ら自身で考えてほしい」といった旨を職員会議で伝え、顧問会議を重ね議論を続けた結果、日番制度が始まった。

後でも残っている。ただ、外部指導員の方や非常勤の先生方の尽力もあり、今はうまく機能しているようだ。「部活動の中でも、事故率が高い部活とそうじゃない部活はあるから、すべての部活に対して一律にこの制度を適用しましよ

—専門技術がないにも関わらず顧問をしなければならぬ事についても問題提起されていますが、教

のように地域移行したものの地域として目を向けたいものだ。

クラブの斡旋を行わなかった場

(文真 廣田)

行はれて、良いかは疑問が残る。日番制度は、生徒の活動に制限をかけることなく、先生の負担も多少軽減される画期的な制度ではないだろうか。また始めて数か月だが、今後の運用に期待したい。

めまぐるしく変化する社会の中で、変化を恐れ思考停止するのではなく、様々な視点で利点や欠点を考慮しながら、部活動がどうあるべきかを「自分事」として目を向けたものだ。

(文責 廣田)

ともに学ぶことは、ともに生きること

実践に見るインクルーシブ最前線

近年注目されるインクルーシブ教育は、障がいの有無や国籍、性別、経済状況などに関係なく全ての子どもが同じ場所で学ぶことを目指す教育の在り方だ。その理念は、誰も排除されることがなく、個々の違いを尊重しながら共に生きる社会の実現に向けた一歩である。障がいのある生徒と、そうでない生徒が出会い、関わる。その中で見えてくるのは、教育の在り方だけでなく、社会の姿そのものかもしれない。私たちは特別支援教育の現場で行われた実践に立ち会い、そこに込められた思いや課題を取材した。(文 喜多輝)

人と人の「差」をなくす

「障がい者」について、何気なく差別的言動を繰り返している人はいくらもいる。でも障がいについてどれほど知っているだろうか。本校では金沢大学附属特別支援学校(以下「特支校」と略称)と提携した活動を数年前から行っている。今回は、本校と特支校の架け橋として奮闘する2人の北嶋先生と北嶋先生を追った。北嶋先生は探究を進める中で、「障がい者」のありのままの姿と、障がい者と健常者の相互理解の推進を目標に掲げている。そして障がい者、健常者のどちらも楽しむことができるイベントの企画を中心に、探究でも、生徒会執行部副委員長としても、精力的に活動を行っている。

「現時点で実行に移したイベントはあるのか。」
北嶋 昨年、ボッチャという障がい者スポーツの大会が特支校で開かれまして、そこに本校の2年生4人が参加して補助をしました。逆に、ここに投げ込んだらどうというのを指示してもらったり、教えてもらったりしました。最後には、親善試合をして交流を深めました。あと、一緒に給食を食べるという活動もしていましたね。
生徒会でも活動しているとお聞きしたのですが、具体的にどのような活動を行っているのでしょうか。
北嶋 お菓子の販売を特支校で行っているそうで、ボッチャの販売の売り行きがあまり良くないという話を聞きました。それで、その宣伝を附属高校生にしてみようという話を聞いたんです。ええ、いいですね。障がい者という話を聞いていただいている。ただ、今はまだ進んでいないですね。

探究へ突き進むもの

「こういった活動をしよう」と思ってきたのはありますか。
北嶋 先輩に、探究で外部の企業とつながる活動を通して起業している方がいて、その方に憧れて活動しようと思ったんです。ですが、その過程で特支校がきもいって、お菓子の販売という、ビジネスというか経営みたいなことをしているという話を聞いたんです。話を聞くことがないので、実際に生徒の話を聞きに行こうと思つて、特支校に行きました。そこで、特別支援とインクルーシブ

成長を横で見守る目

教員が見つめる子どもたちの未来

現場を熟知する教員は、インクルーシブ教育実現に向けた一歩を踏み出す。特支校の先生の話は、障がい者に対する偏見や差別をなくしていくためのヒントになる。特支校の先生は、障がい者に対する偏見や差別をなくしていくためのヒントになる。特支校の先生は、障がい者に対する偏見や差別をなくしていくためのヒントになる。

特別支援学校から見たインクルーシブ教育

「普通科高校と特別支援学校で、カリキュラムはどういう違いがあるのか。」
北嶋 例えは、火曜と木曜は1日中「作業学習」という活動のために学習をしています。国語とか数学もあるけど、どちらかというと「生きるため、生活するための」の学習。それが大きくカリキュラムに位置づけられているかな。そこで課題になったことを、教科の学習にも反映していく。例えば、クッキーのグラム数を量るときに、グラムが量れなかったり、数の概念が分かっていなかったりしたときに、先生がそれを数学の学習に落とし込んでくれる。「生きるため」「生活するため」に使える数学が

総括

「特別支援学校」「障がい者」――私たちは日常の中で、こうした言葉を「距離を置くためのラベル」として使っている。障がい者という言葉を「距離を置くためのラベル」として使っている。障がい者という言葉を「距離を置くためのラベル」として使っている。障がい者という言葉を「距離を置くためのラベル」として使っている。

障がいの有無にかかわらず、互いを尊重し、歩み寄る姿勢を私たちに伝えてくれた。それは教育の枠を超え、人間としての在り方を問い直すメッセージでもある。目の前の「違い」に対して、まっすぐ向き合っていく。障がい者を共に生きる仲間として受け入れること。その第一歩は、無知を知り、変わるということにある。今回の取材は、その意志を育むことの重要性を認識し、発信する、貴重な機会となった。(文 喜多輝)

附属高野球部が敢闘

「石川県一応援されるチーム」へ一歩前進

他の部活動よりも3年生の活動が長かった野球部。7月13日に金沢市民野球場で行われた第107回全国高等学校野球選手権石川大会で、強豪校の星稜と対戦した。3年生にとつて最後の試合と、これまでの野球部での活動を、3年生の黒口凛乃介さんと振り返る。（文 廣田葵）

戦略を練って挑んだ 最後の試合

気温30度超えの中で始まった試合。相手は、甲子園出場経験多数の星稜高校であった。本校は先攻で、初回から積極的にスイングするが、点数にはなかなか結びつかない。そして星稜は1回裏に8点、2回裏に6点を取るなど、序盤から苦しい展開であった。しかし、3回裏、スタンドが湧いた。星稜は三塁まで進塁したものの、本校が結果的に0点で抑えたのだ。黒口さんは「試合で戦う方針として『普通に戦うと勝負にならないので、相手にフライを打たせて、捕る』というのを守備の方針としてやっていた。打たせてフライを捕るって感じ。星稜のことだから、ホームラン狙いで来るだろうし、ここで堅実に戦ったら終わらないな、と思って。狙い通り、向こうは結構ホームラン狙いで振って来てくれました。戦略がうまく決まったので、自分としても嬉しかったし、チームとしてもベンチに戻ったときすごく盛り上がりつつあった感じ」と0点に抑えることのできた要因を語った。

強い意志が 作り上げたチーム

なぜ2人は本校の野球部に入ったのか。宮崎さんは、2019年の本校対二水高校の試合をきっかけに本校野球部の入部を決めたのだという。2019年の第101

1回表でヒットを打つ黒口さん＝廣田撮影

フェンシング 齊藤達さん

楽しさが原動力

専門は「エペ」

フェンシングは、フランスで発祥したスポーツである。2人の選手が対峙し、片手に持った細い剣を用いて、相手の有効な面を攻撃する。フェンシングには「フルール」「エペ」「サーブル」の3つの種目が存在し、使用する剣の形状や得点となる面の部位などが異なる。フェンシングは、フランスで発祥したスポーツである。2人の選手が対峙し、片手に持った細い剣を用いて、相手の有効な面を攻撃する。フェンシングには「フルール」「エペ」「サーブル」の3つの種目が存在し、使用する剣の形状や得点となる面の部位などが異なる。

遠くからすばやく突きをする齊藤さん＝齊藤先生撮影

昔は トランポリン選手

齊藤さんがフェンシングを始めたのは、小学6年生のとき。当時二水高校でフェンシングをしていてインターハイに出場したお姉さんの影響を受けたという。しかし、フェンシングを始める前は、齊藤さん自身が何のスポーツをやりたいのかが分からない時期があ

和やかに話す齊藤さん

大会を振り返って

齊藤さんは、中学3年生のときカデU-17男子エペの国内ランキングで4位となり、バーレーン王国で行われたフェンシングのアジアド選手権に日本代表として出場した。結果は団体で3位、個人で29位。そして本校に入部し、県総体や新人大会では優勝を重ねていく。今年のインターハイでは惜しくも3位だったが、昨年のベスト16を上回る結果を残して、齊藤さんは悔しい思いをしながらも達成感を感じていた。齊藤さんによる

限らない フェンシング愛

齊藤さんへの取材の中で、「ピックラブ」という言葉が何度も出てきた。齊藤さんはフェンシングという競技が好きで、楽しいと話している。楽しいのは競技をしているときだけではない。試合で勝つこともまた、齊藤さんにとって楽し

気を引き締める齊藤さん＝本人提供

齊藤さんの 今後は

確かな実力を持つ齊藤さんは、高校卒業後、どのような道を進むのか。「そこまで試合で勝つというよりは、楽しくやりたいな、みたいな感じ。今は試合で勝つのにシフトしているけど、もうちょっとエンジョイ勢でいいかな」と話す。大学ではプロを目指す。あるいは試合での勝利を目的としたフェンシングではなく、「楽しむ」フェンシングを続けるという気持ち強いと見られる。

頃から野球をやっていたという。中学校では全国大会まで行って、もうやりきった感があったので、高校ではやる気はなかったんです」と話す。高校で野球部に入ることを決めたのは、宮崎さんからの勧誘だった。「ほかの体験に行

後半ピッチャーを務めた喜多さん

二人三脚で 支えた野球部

普段の部活動で2人が意識していたことについて伺った。黒口さんは「声出し」を意識して行ったそう。『声出し』っていう姿勢は、忘れたくないってずっと思っていて、雰囲気作りのためにも、3年生が主導で練習中にいっぱい声を出すっていうのをやっていました」と黒口さんは話す。

さいことを指導しないので、僕はそういうところでチームの規律が乱れるのが嫌で、黒口とは逆に小言とかを言うことが多かったです」と話し出したのは宮崎さん。『用具はちゃんと並べろ』とか『グラウンド内は走れ』とか。逆にそういうことを先輩たちに言

ボールに集中する宮崎さん

そして次の代へ

3年生はこの大会をもって引退し、78回生、79回生にバトンが渡った。後輩へのメッセージとして、黒口さんは「夏の大会のときに、保護者の方であつたり、先輩であつたり、たくさんの方が試合を見に来てくださって応援してくださいました。今年度最初のミ

ちよつとずつ定着してきたかなとは思っています。そういう習慣みたいなものを、この代だけでなく、このチームの『伝統』として根付かせようと思つたら、もつともつと長い時間がかかると思うので、後輩たちも自分と同じような思いでやってくれたらうれしいなと思います」と後輩への熱い思いを語った。

ティングで、「石川県一応援されるチーム」をチームの目標に決めよう、という話をして、みんなをその目指して頑張ってきた。その目標に、一歩近づいたんじゃないかなと思つているので、引き続き目標に向かって頑張つてほしいと思います」と後輩へエールを送った。また、宮崎さんは「大会とかで戦うとなかなか厳しいなとか、絶対勝てないなと思うこともありますが、でも、下手でも胸を張って一生懸命やってくれば、見に来る価値があるなってお客さんに思ってもらえると思う。保護者やマネージャーさんなど、いろんな人から支えてもらって、野球をやっているんで、胸を張って正々堂々とプレーしてくれたいなと思います」と優しく話してくださった。

部活動・課外活動の記録

将棋・テニスが活躍！

女子バレーボール部

決勝トーナメント進出

令和7年度石川県高等学校総合体育大会バレーボール競技
（予選）
0-2 大聖寺
2-0 金沢龍谷
（決勝トーナメント）
0-2 金沢商業



凛々しい表情のバレーボール部
＝バレーボール部提供

男子バスケットボール部

令和7年度石川県高等学校総合体育大会バスケットボール競技
（男子部）
68-49 金沢北陵
29-143 北陸学院

女子バスケットボール部
令和7年度石川県高等学校総合体育大会バスケットボール競技
（女子部）
5-124 小松



シュートを打つ北川さんと見守る出口さん、北川さん＝赤松先生撮影



全力で守備に入るバレーボール部＝バレーボール部提供

卓球部

令和7年度石川県高等学校総合体育大会卓球競技
（男子団体）
0-3 金沢北陵
八柳・石田
2回戦進出



大会を終えて笑顔を見せる卓球部＝廣田撮影

テニス部

ダブルスで燃ゆ



強烈なサーブを打ち込む佐藤さんと森下さん



喜びを分かち合うウェスリーさん（左）と足立さん（右）

総体テニス競技は6月5日から8日まで城北市民テニスコートで行われた。男子団体は惜しくも2回戦敗退だったが、男子ダブルスで2年の佐藤・森下ペアが3位、3年の不室・十二ペアがベスト8となるなど、優秀な成績を収めた。

令和7年度石川県高等学校総合体育大会テニス競技
（男子団体）
3-0 小松明峰
1-2 星稜
（男子シングルス）
足立 2回戦進出
十二 2回戦進出
佐藤 3回戦進出
森下 3回戦進出
不室 ベスト16
（男子ダブルス）
3回戦進出
ベスト16

バトミントン部

1年生も健闘！

令和7年度石川県高等学校総合体育大会バドミントン競技
（女子団体）
0-3 金沢商業
佐伯・岡田
3回戦進出
（男子シングルス）
吉野 2回戦進出
新明 3回戦進出
（女子シングルス）
目を開じて集中する坪野さん



フェンシング

齊藤が県・北信越で優勝、全国で第3位



しなやかな動きでシャトルを返す長田朱永さん＝廣田撮影

令和7年度石川県高等学校総合体育大会フェンシング競技
（男子個人対抗エペ）
齊藤 優勝
令和7年度北信越高等学校総合体育大会フェンシング競技
（男子個人対抗エペ）
齊藤 第3位

編集後記

私たちは何のために学校新聞を発行するのでしょうか。「今」の出来事を本校生徒に知ってもらうため？生徒たちの活躍を伝えるため？「記録」をとるため？頑張り続けてきたため？様々な理由があると思います。さて、ありがたいことに、今年本局は「かがね文芸祭」に参加することができました。そこに集まったのは、いわゆる「強豪新聞部」とも呼べる生徒たち。彼らの新聞を数ページめくただけで、そのすごさが伝わってきます。そんなとき、石川県内の某高校新聞部の先生の話が

頭をよぎりました。「賞を取れる紙面を」。先に述べた強豪の新聞部に（某高校含む）は、賞を取るために新聞を書いているのでしょいか。果たして本当に、賞をとる紙面を第一に意識して新聞を書くのか。その記事でも、「運動会の応援披露」の記事でも、伝統を受け継いだ、また伝統を愛した先輩方の思いを新聞に残し、今後の方針について考えるきっかけ作りとしました。それが新聞の果たすべき使命です。一方で日頃培ったスキルを発揮し、称えられることもまた編集局としての活動する原動力となりうるのではないかと、総文を総文に感じました。

最後になりますが、今号作成にあたりご協力いただきました皆様、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

将棋部 祝・全国優勝！

女子団体ががね総文祭出場

第61回全国高等学校将棋選手権大会石川県大会が5月24日、25日に行われた「かがね総文祭2025」にも出場し、悲願の優勝を果たした。将棋部は次号で特集予定位をつかんだ。女子団体は、7月である。



全国制覇した将棋部の女子団体＝将棋部提供



余裕の戦いを制した寺井さん＝将棋部提供

吹奏楽部

第73回石川県吹奏楽コンクール

その他表彰

公益財団法人石川近代文学館第12回広津里香記念高校生による「創作詩」
高他 入賞
津田塾大学「高校生フィードバック・コンテスト2025」
野田 最優秀賞
公益財団法人セディア財団主催「第9回高校生が描く明日の農業コンテスト」
野田 金賞

新聞編集局

廣田（局長） 栗 輝
山本 輝史 喜多 輝
辻 一颯 森下 怜
安藤 友以 岡田 春明
宮崎 隼 上坂 諒
東出 尚己 中西 瑛大
向出 ひまり
森泉 玲奈（顧問）

